

広島大学図書館蔵『百人一首聞書』享禄三年写本翻刻(二)

佐々木 勇

広島大学日本語史研究会

ここに翻刻する『百人一首聞書』は、広島大学中央図書館貴重書室に蔵される、享禄三年(一五三〇)二月の写本である。前号「広島大学図書館蔵『百人一首聞書』享禄三年写本 翻刻(一)」に続くものであり、次号掲載の(三)をもつて完結予定である。翻刻の御許可を頂いた広島大学図書館に対し、心中より御礼申しあげる。前号に簡単な資料解説をしている。御参照願いたい。

(佐々木 勇 記)

〈凡例〉

一、本翻刻は、広島大学図書館蔵『百人一首聞書』(大関²⁵⁴ワカ⁷⁴)の原本に基づき、その全体を、現行の字体に改めたものである。仮名遣いは、原本のままとした。行取りも原本のままとしたが、長文の紙背注は追い込み式とし、改行を／で示した。

一、紙背には、歌作者と歌への注が有る。それらの注は、各歌の後に「裏書」として、一字分下げて挿入した。この「裏書」には、朱の合点二種が存する。

／は歌作者への注、／は歌に対する注に冠されている。

一、原本に加点された朱声点は、(平)・(上)・(平濁)・(上濁)などと認定したものを、当該字の直下に記した。

一、振り仮名は、本行より時代の降る加点である。本行の濁点は、振り仮名と同筆である。

一、翻刻にあたり、検索の便のため、百人一首の歌番号と注の行数を付した。また、(第〇紙)として紙数を、表面の当該箇所に入れた。

一、その他、必要と思われる注を、「」に入れて当該箇所に記した。

一、本翻刻は、坂水貴司・申智娟・植村志保・菅近晋平・服部芳野・檜崎寛之・東影あさひ・堀場菜月・篠原涼・糸山由樹・西浦瑞姫・佐々木勇で作成した。本文入力作業は坂水・申が行ない、佐々木が確認・修正した。

〈翻刻〉

古今

(第九紙)

坂上^{さかのうえ}是則^{このり}

31朝^{あさ}ほらけ有明の月とみるまでによしのゝさとにふれる白雪^{しじゆき}

冬部

「裏書」大内記従五位下加賀介御書所預望城父也

田村將軍末葉云々

やまとにまかれりける時に雪のふりけるをみてよめる

31 朝ホラケトハ只今起出テ見景氣ナリ雪ノウス

31 トフレルヲ有明ノ月ノ殘レルカト見マカヘタル由ナリ

31 よしの、里トイヘルハ此所雪月花ノ名所ナレハ月や

31 ラントおほめくか餘情ニ成テ感ノアル也心ヲ付テ

31 可レ見

古今 春道列樹

32 山河に風のかけたるしからみはなかれもあへぬもみちなりけり

「裏書」從五位下雅樂頭新名宿祢一男 文章生正六位上 壹岐守

志賀の山こえてよめる

32 比歌志賀ノ山越ニテヨメルトアリ如意力峯越ニ通

32 ル時ノ景氣ナルヘシニ三ノ句ノ心谷風ノ吹上ルマヽニ

32 水ノ木葉ヲ吹タメテ流サヌ所ヲ云詞ナリサテ下

32 ノ句ニ流もあへぬ紅葉ソトコトワル歌ナリ或儼ニ不

32 落ル木の葉ノ水ノ上ニひまなくうみタルを風ノカケタル

32 柵ト云ト云義アリソレハ柵ト云字慥ニニコエサルニヤ

古今 紀友則

33 久かたの光のとけき春の日にしつ心なく花のちるらむ

「裏書」大内記 紀有朋息 紀納言末云々

さくらの花のちるをよめる

33 久堅ノ日ノ光長閑ケキト云ヘキツヽキヲ言葉ノヨキニ

33 引レテ カク云ナスカ 一ノ姿ナリカク長閑ナル折節

33 ニモ花ノ心ハ静ナラス散ライソキケルヨト云也木ノ

33 間ヨリ隙モナク落ル花ヲ見テイヘル歌ナリカ様ニハネ

33 字ナクハヌル歌ハ思惟ノ籠ル時ノ事也 藤原興風

34 誰をかもしる人にせん高砂の松もむかしのともならなくに

「裏書」治部丞曾祢道成男 参議濱成孫 下総權守

34 コレハ老者ノ心ニ今誰モ知人ノナキヲ佗テ松ハ久キ

34 物ナレハ友ト思ヘケレトソレモ前ヨリ契リタル事ノ

34 ナケレハ甲斐ナシト云也朋友ノ皆過去ニヨリテ云詞也

古今 紀貫之

35 人はいさ心もしらす故郷ははなそむかしの香に、ほひける

〔裏書〕 紀文幹子 玄番頭從五位上木工權頭童名内教坊阿古久曾

はつせにまうつることにとりける人の家に久しくやとて／程へて
後にいたれりければかの家のあるしかくさたかに／なんやとりはある
といひ出して侍ければそこにたたりける／梅の花を折てよめる

35 1 コレハ長谷ノ内教坊ニ行タル時かくさたかにやと

35 2 りはあると坊主ノ云出シケレハ其返答ニハ及ハテ

35 3 梅花ヲ折テ讀ルナリ哥ノ心人ハいさトハ坊主ノ恨ヲ

35 4 心ニ持テ誠ニウツキヲ恨ミ給ヘルヤラン難レ知 只モト有

35 5 シ心ニカハラヌ物ハ梅ノ香ニテコソアレト哥〔ママ〕歌ナリ

35 6 餘情無レ限心ヲ付テ可レ見ナリ

古今 清原深養父

36 夏のはまた宵ながら明ぬるを雲のいつこに月やとるらむ

〔裏書〕 豊前守房則男 筑前介海雄孫 散位從五位下

月のおもしろかりける夜あかつきかたによめる

36 1 秋冬ノ長夜ニ合レハ夏ハ宵ナカラ明ホトノ短夜ナリサ

36 2 レハ山ノ端マテ行ツカスシテ〔シテ合テ〕いつこの雲間にて月は明

36 3 ヌラント云心ナリヤトルトハソコニトマリテ明ル心也

後撰 文屋朝康

37 白露に風の吹しく秋の、はつらぬきとめぬ玉そちりける

〔裏書〕 先祖不詳 延喜二任大舍人允

37 1 風の御時哥めしければ

37 2 散如クニ見ユル露ナリト云詞ナリ

拾遺 右近

38 忘らるゝ身とはおもはずちかひてし人のいのおしくも有哉

戀四

〔裏書〕 交野右近少将季綱女

大和物語 おなし女おとこのわすれしとよろつことをかけてち

38 1 此歌人ニ忘ラレテ 我身ノウサヲハサテヲキヌ神

38 2 カケシ誓故人ノ命ノ若ツマラハソレコソ惜キ事

38 3 ニテアレト身ヲ捨テ人ヲ思ヘル所力此歌ノ感也

後撰 参議等

39 あさちふのをの、しのはら忍ふれとあまりてなとか人の戀しき

戀一

マレラ或ネカウ
〔裏書〕源中納言從三位希一男、美濃權守正四位下 左中弁 勘解由

天曆五 三十 薨 七十一

〔第十二紙〕

39 1 浅茅生ノ小野亦しのはら名所トイヘトモ只小野ノ

39 2 浅茅ノ中ニ篠原ノアル由ナリ上ニ句序ナリ忍ヒア

39 3 マリテ戀シキト云ヘキヨ二句ニ延テイヘルカ餘情ア

39 4 リテ面白ナリ

拾遺 平兼盛

40 忍ふれと色に出にけり我戀は物やおもふと人のとふまで

戀一 〔裏書〕兵部大輔篤行三男 前駿河守從五位上 光孝御末云ミ

40 1 此歌忍フトスレトツハミアヘヌ色故 物思フカト人ノ問

40 2 マテ成ヌト云ナリ 誠ニ麗シキ哥ノ牀ナリ

拾遺 壬生忠見

41 戀すてふわか名はまたきたちにけり人しれすこそ思そめしか

戀一 〔裏書〕右衛門府生忠客男 天徳二年任撰津大目 本名忠實

天曆御時哥合

41 1 我ナハマタキトハ 早ク 名茅ノ立由ナリ大方ニハ人シラ

41 2 シト思初ツレトモイツシカワカ名ノ早ク世ニ漏ルト云

41 3 ナリ

後拾遺 清原元輔

42 契きなかしたみに袖をしほりつゝ末の松山波こそしとは

戀四 〔裏書〕春光一男 深養父孫 母筑前守高向利生女 肥後守從五位上

心かはりて侍ける女に人にかはりて

42 1 かたみトハ互ニナリ 契ノ切ナル儘ニフタリ袖ヲシホ

42 2 リツハ古ヘ松山ノ浪コスヤウノ契アリシハアタ人

42 3 ノコトハサナリ サハアルマシキソト云テヤカテ亦心カハ

42 4 ル人ニ云ヤル歌ナリ

拾遺 權中納言敦忠

43 逢みての後の心にくらふればむかしは物をおもはさりけり

戀二 〔裏書〕贈太政大臣時平三男 母筑前守在原棟梁女貞信公甥也

伯父國經室也 中納言從二位 号本院中納言 又号枇杷中納言

天慶六 三七 薨 卅八 題しらす

43 1 アヒミヌサキモノハ思ヒシカ共 契シヨリ後ハゼン

43 2 方モナク思ノ深ケレハ前ニ對弁シテ云歌ナリ此 苦ハ

43 3 アハヌサキヲ云ナリ

拾遺 中納言朝忠、

44 逢ことのたえてしなくは中く人にをも身をもうらみさらまし

戀一

〔裏書〕右衛門督從三位 三条右大臣定方二男 母中納言山蔭女

号土御門中納言 又号木橋中納言

天曆御時哥合に

44 1 上句自面下句ノ心人ヲウラムトハ相會程ナラハ亦カク

〔第十二紙〕

44 2 ツラカルヘキニ非スト云身ヲ恨ムトハ契リシ後亦

44 3 ウトケレハミカキルニモヤアラント身ヲ恥ウラムル由

44 4 ナリ

拾遺 謙徳公

45 あはれともいふへき人はおもほえて平過身のいたつらに成ぬへき哉

戀五

〔裏書〕伊尹 九条右大臣師輔一男 母武藏守從五位上經邦女

号一条 天祿三十一 一薨 卅九

物いひ侍ける女のつれなく侍て更にあはす侍ければ

45 1 此歌コトカキニ物いひける女の後につれなく侍て

45 2 さらにあはす侍ければトアリ 上句ノ心ワカ志ヲ感ス

45 3 へき人モ今ハおもほえぬト云ナリ サテ下句ニ身ノ

45 4 徒ニ成ヌトハ今更思ヒウツラン方モナケレハ身ハアタ

45 5 物ニ成ヌヨト恨カクル由ナリ

新古今 曾祢好忠

46 由良の戸をわたる舟人かちをたえ行衛もしらぬ戀の道哉

戀一

〔裏書〕俗傳 丹波孫仍号曾丹但任日不見

寛和之比人也

題しらす

46 1 由良ハ紀ノ海南海西海ヒトツニ茫と然トシタル

46 2 所ナリ上三句ヲ序トシテ「シテ合字」我戀ノ行衛モハテモナ

46 3 キヲコレニタトヘタル由ナリ かちをたえトハ櫂ヲ

46 4 捨テ舟ニ任スル由ナリ 戸ト云ハ海ノ道ノ筋ヲ

46 5 云則舟路ナリ 河戸ト云モ河ノわたる筋ヲ云戸

46 6 わたる千鳥ト云モ波ノ上ヲワタリツケタル筋ノアリ

46 7 テ行ヲ云

拾遺 惠慶法師

47 八重葎しける宿のさひしきに人こそみえね秋はきにけり

秋部

〔裏書〕播磨國講師 寛和之比人有家集

河原院にて荒たる宿に秋來といふころを人々よみ侍けるに

47 1 此歌コトカキニ河原院にてあれたる宿に秋來と

47 2 いふ心を入くよみ侍けるにとアリハ重律トハ葎ノ

47 3 深く多キヲ云さひしきにト云ハ餘情ニコメテ有へキ

47 4 アアラハニ詞ニ出セルハ彼融公在世ノ時車馬成レ市

47 5 門前不レ去放ニイツシカ人跡絶ハテハ悲ミヲソフル秋ノミ

47 6 來レリト云心ニテさひしきト云字ヲ憚ヌカ此歌ノ感

47 7 ナリ假令俊成卿ノ歌ニ野への秋風身にしてみてトイへ

47 8 ル此三句ニ類スヘキニヤト云歌ナリ

詞花 源重之

48 風をいたみ岩うつ浪のをのれのみくたけて物をおもふ比かな

戀上 〔裏書〕参議兼忠三男 具平親王孫 從五位下兼信子

冷泉院春宮と申ける時百首哥奉りけるによるる

48 1 風ヲイタミトハ風ヲツヨミト云詞ナリ風痛ト書上二句

48 2 序ナリをのれのみハ我ノミナリクタクテ思ふトハ数と

48 3 ニ物思フ事ノ切ナル由ナリ

詞花 大中臣能宣

49 みかきもり衛士のたく火のよるはもえ書は消つ、物をこそ思へ

〔裏書〕祭主神祇大副 正四位下頼基男

題しらす

49 1 みかきもりトハ六衛府ヲ云此中ニ左右近衛ヲハ近キ

49 2 マモリト云左右兵衛左右衛門ヲトノエモルミカキモリ

49 3 ナト古今ノ長歌ニモ見タリ愛ニテノみかきもりトハ

49 4 衛トイハハン為ナリ其被官ヲ士ト云心ナリ左右衛門ノ

49 5 被官火ヲ焼ハ云上二句ハ譬ナリ我戀ノヨルハ焼

49 6 晝ハ心ノ消ワタリテ悲ギト云由也

後拾遺 藤原義孝

50 君かためおしからさりし命さへなかくもかなとおもひけるかな

戀二 〔裏書〕一条摂政謙徳公三男母代明親王女 右近少將從五位上

康平三八 土佐國配流

女のもとよりかへりてつかはしける

50 1 此哥コトカキニ女のもとよりかへりてつかはしけるト

50 2 アリカみのくノ心古今命やはなにそは露のあたものを

50 3 あふにしかへはおしからなくにトアリカ様ニコソ思シニ逢見

50 4 テ後ハ命アレハコソウレシキ専ニモアヘト思ヘハ今更

50 5 玉ノ緒ノ長キヲ憑ムソトイヘル歌ナリ

後拾遺

藤原實方朝臣

51 かくとたにえ(上)や(上)は(上)い(上)ふ(上)濁(上)き(上)の(上)さ(上)し(上)戀一
も(上)く(上)濁(上)さ(上)平(上)さ(上)平(上)し(上)も(上)し(上)ら(上)し(上)な(上)も(上)ゆる(上)思(上)ひ(上)を(上)

〔裏書〕侍従定時男 陸奥守 正四位下

女にはしめてつかはしける

51 1 えやはいふきトハかくともエイハヌト云ツ、キ也思フ事

51 2 ヲ心ニ籠テイハネハサ思フトモハシラシト云心也此
〔第十四紙〕

51 3 いふきハ下野國ナリさしも草ハ差蒿ト書蓬ノ

51 4 一名ナリ 下句さしもトハサモナリ燃思ひとハ六帖哥ニ

51 5 あちきなやいふきの山のさしま「マ」草をのか思ひに身を

51 6 こかしつ、此下句ノ心ニテ讀ルナリ此六帖ノさしま「マ」草

51 7 亦させも草何モ五音通シテ「シテ合字」云同草也袖中抄ニ詳也

後拾遺

52 明ぬれはくる、物とはしりなから猶うらめしき朝ほらけかな

戀一

藤原道信朝臣

〔裏書〕法住寺大臣恒徳公四男 母謙徳公女左近中将従四位下

女のもとより雪ふり侍ける日かへりてつかはしける

52 1 コレハ後朝ノ戀ナリ明テクル、理ハ誰モ知トモ明ル

52 2 夜ノツラキ暮ヲマタンマトヲサニ猶ウラメシキ朝

52 3 ホラケト云也 契ニ後暮ノ歌ナルヘシ

拾遺

右大将道綱母

53 歎つ、独ぬるよのあくる間はいかに久しきものとかはしる

戀四

〔裏書〕陸奥守藤原倫寧女 摂政太政大臣兼家室 長能妹

入道摂政まかりたりけるに門をそくあけ、れは立わつらひぬ、といひ入て侍ければ

53 1 此歌拾遺ニ入道摂政まかりたりけるにかとををそくあ

〔第十五紙〕

53 2 け、れはたちわつらひぬといひ入て侍ければうちよりよみて

53 3 いたしたるトアリ 歌ノ心君トハテ独待アカス歎ハイカ

53 4 ハカリ久シキ物トカ知給ランカリソメニ立テサヘ苦ト

53 5 ノタマウニテ知給フヘシト云歌也 此摂政ハ一条伊尹也

儀同三司母

新古

54 忘れしの行末まではかたければけふをかきりのいのちともかな

戀三

二の擦消重書

〔裏書〕從二位成忠女 又二条関白 中関白 道隆男 伊周公 母

中関白かよひそめ侍ける比

道隆公中一ト云

54 1 此歌コトカキニ 中関白道隆かよひそめ侍ける比ト

54 2 アリサレハ思ソムル 志ニテ行末長ク契レトモ其マ、

54 3 ナランハ難キ事ナレハカク不レ飽思フ今日ヲ限リニシテ
54 4 命ノ絶ヲラハ思ひ出ニモ成ヘシト云心ナリ

拾遺千載
55 瀧のをとはた(平)え(上)て久しく成ぬれと名こそなかれて猶きこえけれ
難上 難上 大納言公任

〔裏書〕三条關白太政大臣 賴忠 一男 小野宮太政大臣實賴孫

母代明親王女 号四条大納言 正二位

大覚寺に入とあまたまかりたりけるにふるき瀧を讀侍ける
右衛門督公任

千載集 難上

さかの太覚寺にまかりてこれかれ歌よみ侍けるによみ侍ける 前大納言公任

55 1 此歌拾遺ニ 太覚寺に人くあまたまかりたりけるにふる
(第十六紙)

55 2 き瀧をよみ侍ける トアリ 此時分ハヤ瀧モ落ヌホ

55 3 トニフリタル由ナリ 下句此所隨分ノ古所ナレハ其稱

55 4 号ハナカラヘテ今猶キコユト云ナリ

後拾遺 和泉式部

56 あらさらむ此世の外の思ひ出に今一度のあふこともかな
戀ニ

〔裏書〕上東門院女房 越前〔後〕を訂正 見消符有り 守正四位下大江雅致
女 母越中〔後〕を訂正 見消符有り 守保衡女ノ昌子内親王乳母
和泉守道貞為妻仍有此名

私云此作者傳隆有異説 拾遺集ニ雅致女式部トアリ
心ちれいならず侍ける比人のもとにつかはしける

56 1 此歌コトカキニ こ、ちれいならず侍ける比人のもとに

56 2 つかはしける トアリ 哥ノ心此世ニハイク程もアルマシキ

56 3 程ニ後ノ世ノ思ひ出ニ今一度アハヤトネカフヨシ也

新古 紫式部

57 めくりあひてみ(平)し(上)や(平)それともわかぬ間に雲か(上)く(平)れ
難上 (平)にし夜はの月かけ

〔裏書〕越後守為時女 鷹司女房 母常陸守為信女

源氏物語中作紫卷仍号紫式部

はやくよりわらはともたちに侍ける人の年比へて行あひたるを／ほの
かにて十月十日のころ月にきほひてかへり侍ければ

57 1 此歌コトカキニ はやくよりわらはともたちに侍ける人

57 2 の年比へて行あひたるほのかにて十月十日比月に

57 3 きをひてかへり侍ければとあり此ハヤクヨリト旧ト云

57 4 詞ナリ 月にきをひてトハ月ノ入トトモニト云心ナリ

57 5 歌ノ心 モトノ友タチニメクリアヒテソノ人ヤラントサタ

57 6 カニモ ワカヌ程ニ帰リケレハ月ノ俄ニ雲ニカクル、如ク

57 7 名残ノおしきト云由ナリ

後拾遺

「ヤ^(上)マ^(平)」「朱」

大貳三位たいにのさんい

58 あ(上)り(上)ま(上)山(平)な(上)のさゝはら風吹はい(上)て(平濁)そよ人
をわすれやはする

二、戀

〔裏書〕、山城守五位下宣孝女 母紫式部、後冷泉院御乳母

太宰大貳成章妻 仍号大貳三位

かれくなるおとこのおほつかなくなといひたりけるに／よめる

58
— 1
此歌^{うた}コト^{こと}カキ^{かき}ニ^に
かれくなるおとこのおほつかなくなといひ

58-2 たりけるによめる 哥^{うた}ノ心ありま山^{やま}ゐなのトハ 兩^{りやう}所^{しよ}トモニ

58
3
撰津國ノ名所ナリ上三句序ナリ下ノ句ノ心いてト

58
4
發ほつ語ごナリ
イサ、
カフ
テタル様やうノ事こと也なり
そよ
トハ驚おどろ

ク 詞 くことは
コ こはい
ハ はかに
イ いにな
カ か
ニ に
ナ な
ト と
カ か
ム む
ル る
由 よし
也 なり
ソ そ
ナ な
タ た
コ こ
ソ そ
カ か
レ れ
く く
ニ に
ナ な
レ れ
ワ わ

58-6
レヤハヲホツカナキ事ノアルトカコツヤウノ下句也

後拾遺

赤染衛門 あかそめのゑもん

59 やすらはてね(平)な(平)ま(平)し(平)物をきよふけて 傾 までに月をみしかな

戀一

〔裏書〕、前大隅守赤染時用女、鷹司女房、實平兼盛女也。

依右衛門志尉等号 赤染衛門

中關白少將に侍りける時は、らかなる人に物いひわたり侍りけり。たのめてまうてこさりけるつとめて女にかはりてよ／＼める

59-1 此歌コトカキニ 中の關白少將に侍ける時はらかるなる人
(第十七紙)

59-2 に物いひわたり侍はんへりけり たのめてこさりけるにつとめて

59
3
女にかはりてよめる
トアリ此女トハはらからの事ナリ妹

59
—
4
ニ
替^{かわり}テ^て
讀^よむ
歟^か
歌^{うた}
ノ^の
心
タ^た
ノ^の
メ^め
テ^て
コ^こ
又^{また}
夜^よ
ナ^な
レ^れ
ハ^は
ク^く
ル^る
マ^ま
テ^て
ト^と

59
—
5
ヤ^や
ス^す
ラ^ら
ヒ^ひ
ニ^に
ネ^ね
モ^も
セ^せ
テ^て
夜^よ
ヲ^を
深^{ふか}
ス^{なり}
也^{なり}
サ^さ
レ^れ
ハ^は
月^{つき}
ノ^{のかた}
傾^{むく}
マ^ま
テ^て
見^み
盡^{つく}

59
6
シテカヤウニ心ノカハルヲシリタラハヤカテウチネヌヘキ

59
7
物ヲ恨ミヤル哥ナリ

金葉
小式部内侍

60 おほえ山いくの、道のとをければまたふみもみす天のはしたて

雜上

〔裏書〕、陸奥守橘道貞女、和泉式部女、上東門院女房

和泉式部やすまきにくして丹後國に侍ける比都に哥合／のありければ

來て歌はいかゝせさせ給丹後へは人つかはしてけんや／使またまうて

こすやいかに心もとなくおほすらんとたはふれて／立てけるを引とゝめて

此歌ノコトカキニ
和泉式部
保昌にくして
丹後國に侍

60-2 ける比こころみやこに哥うた合あわせのありければ小式部こしきぶ内侍ないしうたよみに

60-3 とられて侍りけるを定頼卿つほねのかたにまうてきて

60-4 哥うたはいか、せさせ給丹後給ふたんごへは人つかはしてけんやつかひまた

60-5 まうてこすやいかに心もとなくおほすらんとたはふれて

60
1
5

60 6 たちけるをひきとゝめてトアリ 歌ノ心おほえ山いく

60 7 野何モ丹波ノ名所ナリ此所トモヲ越テ丹後へ行

60 8 ハソノ程トヲキニヨリテ天ノ橋立ヲハイマタフミミス

60 9 ト云ナリ此踏ミルト云詞表ノ儀ナリ裏ニ文見ト云

60 10 心アリ橋立ハ丹後ナリコレヨリ哥人ノ名ヲエタルト

60 11 ナン

詞花 伊勢大輔

61 いにしへのならの都の八重さくらけふこゝのえににほひぬるかな

春部 「裏書」祭主輔親女 上東門院女房

一条院御時ならの八重さくらを人の奉りて侍けるをそのおり／御前に侍ければその花を給ひて歌よめとおほせられけ／れはよめる

61 1 此歌コトカキニ 一条院の御ときならの八重櫻を人の

61 2 奉りて侍けるをそのおり御前に侍ければその花をた

61 3 まひて哥よめとおほせられければよめる トアリ哥心

61 4 上句ハ昔都ナリシ奈良ノ八重櫻ト云也下ノ句ノコヽロ

61 5 けふ此都ニ又句へハ一入花モ色香ノソフ心チスト云ヲ

61 6 八重サクラけふ九重ト云ナスナリ此九重ニ宮中ノ心モ

61 7 籠れリ

後拾遺 清少納言

62 夜をこめて鳥のそららね 是は是はよかる とも世にあふさ

維二 かの關はゆるさし

「裏書」清原元輔女 一条院皇后定女房

大納言行成物かたりなとし侍けるに内の御物いみにこもれ／はとていそ

62 1 此歌コトカキニ 大納言行成物かたりなとし侍けるに

62 2 内の御物いみにこもれはとていそきかへりて鳥のこゑに

62 3 もよほされてといひおこせて侍ければ夜ふかゝりける鳥

62 4 のこゑは函谷關の事にやといひにつかはしたりけるをた

62 5 ちかへりこれはあふさかの關に侍りとあればよみ侍けるト

62 6 アリ 此函谷關トハ昔孟嘗君其國ヲニゲ行

62 7 時函谷關ニイタリテ夜深ク通ルヘキ様ナクシテ

62 8 計略ニ我三千ノ徒ノ中ニ雞客トテ 雞ノマネヲ能

62 9 スル者アリソレニ 雞ノマネヲサセタレハ關ノ 雞トモ夜

62 10 のあくるとおもひてみななきしなりきてまたけんかくとていぬのまね
ノ明ルト思テ皆鳴シナリサテ亦犬客トテ犬ノマネ

62 11 スル客ニ犬ノ吠ルマネヲサセタレハ關ノ犬トモ吠シナリ
するかくにいぬほゆるまねをさせたれはせきのいぬどもほへしなり

62 12 其時關守人ノ通ル時分ニナリヌト思テ關ヲアケシコト
そのときせきものひとをとるちぶんになりぬとおもひてせきをあけしこと

62 13 アリ哥ノ心上句ハ今ノ函谷ノ關ニテノ事ヲ云ハカル
ありうたのかみのくはいまのかんこくのせきににてのこをいはかる

62 14 トモトハタバカルトモト云詞ナリ函谷ニテコソ鳥ノマ
ともとはタバカルトともといふことはなかりかんこくにてこそとりのま

62 15 ネヲシテタバルトモ相坂ノ關ハ夜深クトラルヲハ許ス
ねをしてたばるともあふさかのせきはよふくとをるをゆるす

62 16 マシキソト云下句ナリ世ニハ物語ナトノ詞ニツカヘル詞
ましきそといふしものくなりよとものかたりなとのことはつかへることは

62 17 物ヲツヨクイハントテ置字ナリ世ニアルマシキ事ナト
ものをつよくいわんとておきざなりあるましきことな

62 18 云類ナリソラネトハソラコトナキト云心ナリ
いふなりそらねとはそらことなきといふなり

後拾遺
63 今はたゝ思たえなむと許を人つてならていふよしもかな
左京大夫道雅

戀二
〔裏書〕帥内大臣伊周公息 母大納言重光女

伊勢の齋宮わたりよりのほりて侍ける人に忍ひてかよひける事をお
ほやけにきこしめしてまもりめなとつけさせ給ひて忍ひにもかよは

す成侍にければよみ侍ける

63 1 此歌コトガキニ伊勢の齋宮わたりよりのほりて侍
うたことかきにいせさいくうはんへり

63 2 ける人にしのひてかよひける事をおほやけも
こと

63 3 きこしめしてまもりめなとつけさせ給てしのひにも
たまひ

63 4 かよはすなりにければよみ侍けるトアリ歌ノ心齋宮
はんりうとありうたのさいくう

63 5 ワタリトアレトモ是ハ齋宮ノヨリ居給ヘルヲ此道雅
わたりとあれともはさいくうのおりぬたまへるをこのみちまさ

63 6 ノ密通アリシ事ナリヨリテ世ノキコエモアレハトテ
のひそかにかひひありしことなりよりてよのきこへもあれはとて

63 7 おほやけもまもりめなとつけられし時ノ歌ナリ心ハ
おほやけもおもてもかひなきほどにちぎりもたへなんといふをいまひとひ

63 8 今ハ思テモカヒナキ程ニ契モタエナント云ヲ今一度
いまおもてもかひなきほどにちぎりもたへなんといふをいまひとひ

63 9 人傳ニアラタイハヤト云ナリ
ひとつてにあらていはやといふなり

〔第十九紙〕
千載
64 朝ほらけ宇治の河霧たえくにあらははれたる瀬のあしろ木
あさきうぢかはきりこんちやうなんさだよりせまぎ

冬部
〔裏書〕大納言公任子 母四品治平親王女
宇治にまかりて侍ける時よめる

64 1 歌ノ心河霧ノ次第二明行マヽニ消モテ行ハ近キヨリ
うたのかはきりのしたひにあけゆくまにきもてゆくはわかきより

64 2 遠ギ網代ノヲノツカラ顯レ行由ナリ網代ハイタリテ
はるかきあしろのをのつかからあらはれゆくなりあじろいたりて

64 3 寒キ時氷魚ノヨルヲトラン為ニコシラヘタルモノ也
さむきときこほうをのよるをとらんためにこしらへたるものなり

64 4 イマコノ網代ヲ霧ニ見タル哥也 冬哥也
いまこのあしろを霧にみたるうたなりふゆのたなり

後拾遺
65 うらみ侘ほさぬ袖たに有物を戀に朽なむ名こそ惜けれ
あるものこのひこひさぐも

戀四
〔裏書〕入道一品宮女房 父不詳 相模大江公資為妻故号相模
本名乙侍従

永承四年内裏哥合に

65 1 ホサヌ袖ヲニトホ ホサヌ袖ノ朽ンヲニ思フ上ニ亦名ノ

65 2 戀故クチンコソカナシケレト云歌ナリ

金葉 大僧正行尊

66 もろともにあはれとおもへ山櫻花より外にしる人もなし

〔裏書〕白河院御子 三井寺ノ平等院 又云小一条院御孫

大峯にて思ひかけすさくらの花のさきたるを見て

66 1 此歌コトカキニ おほみねにて思ひかけす櫻のはなのさ

66 2 きたるをみてトアリ哥心 モロトモニトハ花与我ナリ

66 3 あはれとおもへトハ此山深ク開タレハ我モ花ヨリ外ノ友ナ

66 4 ク花モ我ヨリ外ノシル人モナケレハト云心ナリ 因云大峯

66 5 へハ順ノ峯逆ノ峯トテ年中ニ兩度入ナリ逆ノ峯

66 6 トハ四月也此頃花ヲ見テノ歌歟

千載 周防内侍

67 春のよの夢はかりなる手枕にかひなくたゝむ名こそおしけれ

〔裏書〕周防守継仲女 冷泉院女房

二月はかり月あかき夜二条院にて人々あまたゐあかして物かたり
なとし侍けるに内侍周防よりふして枕をかなと忍ひやかにいふを聞

て大納言忠家これを枕にとてかゝるをみすの下よりさし入て侍けれ
はよみ侍ける 春のよの——といひ出して侍ければ返しに／よめ
る契りありて春の夜深き手枕をいか／かひなき夢に／なすへき 忠家

67 1 此歌コトカキニ 二月はかり月あかき夜二条院にて人々

67 2 あまたゐあかして物かたりなとし侍けるに内侍周防より

67 3 ふしてまぐらをかなとしのひやかにいふを聞て大納言

67 4 忠家これをまぐらにとてかひなをみすのしたよりさし

67 5 いれて侍ければよみ侍けるトアリ歌ノ心春の夜の

67 6 夢はかりなるトハ逢トモ短夜ノ手枕ニカヒナク名ノ

67 7 タハハ惜キ事ナリト云ナリ夢はかりトハ夢ホトハ

67 8 云心カヒナクト云ニカイナト云字ヲ讀入タリ

後拾遺 三条院御製

68 心にもあらでこの世になからへは戀しかるへき夜はの月かな

〔裏書〕冷泉院第二御子 母贈皇后宮藤原超子 御在位五年

御諱 居貞 六十七代 寛仁元年五月九日 崩 四十二

れいならすおはしまして位なとさらんとおほしめしける比月の／あか
りけるを御らんして

68 1 此歌コトカキニ 例ならすおはしましてくらゐなとさら

68ー2 んとおほしめしける比月のあかゝりけるを御らんして

68ー3 トアリ 歌ノ心此度ヲ限リト思食トモ若御心チ

68ー4 ヲコタリテ世ニナカラヘサセ給ハ、今夜禁中ニテ

68ー5 御覽スル月カ戀シカルヘキヨト後ヲカケテアソハス

68ー6 御歌ナリ

後拾遺
69 あらし吹みむろの山の紅葉とは龍田の川のにしきなりけり 能因法師

秋下
〔裏書〕橘元愷子 俗名長門守永愷 号古曾部入道

永承四年内裏歌合によめる

69ー1 歌ノ心三室山ニテハ紅葉ノチリ亂ルハトミエシカ立

69ー2 田川ニテハ錦ヲ曝如ナリト云歌ナリ三室山ハ龍

69ー3 田川ノ河上大和ノ名所ナリ

後拾遺
70 さひしさにやとを立出てなかわれはいつくもおなし秋のゆふくれ 良暹法師

秋上
〔裏書〕父不詳 祇園別當 童名白菊

題しらす

70ー1 此歌サヒシサハ我宿カラカト思テ立出テ見レハヨソ

70ー2 ノタモ同シサヒシサナリト云ナリ 狭廣キカハリ計

70ー3 ニテコソアレタノ感ハ同シ物ニテアルソト云也

(続く)

〔付記〕 本年めでたく定年を迎えられる吉田裕久先生は、本会のような目立たない活動もご理解下さいました。

先生の研究姿勢に、会員一同、今後も学びたいと考えております。

(佐々木 勇・広島大学)